

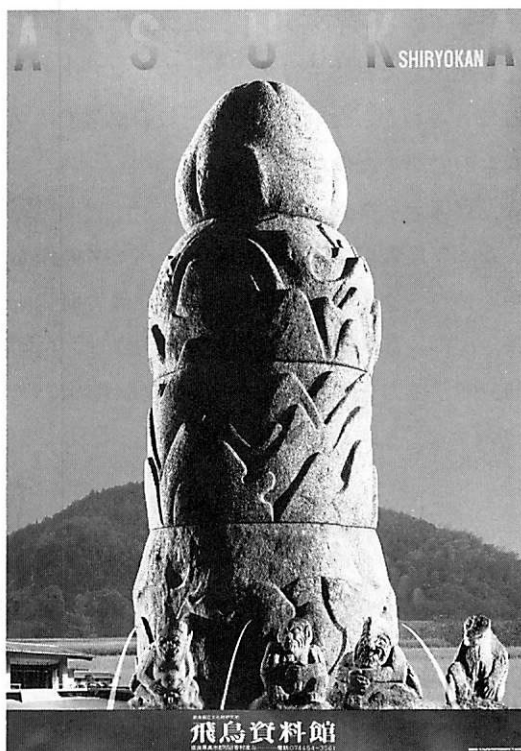
飛鳥資料館特別展示

飛鳥資料館

特別展示「仏舍利埋納」 我国で出土した舍利容器のうち、遺物の現存するのは、崇福寺跡・太田廃寺（三島廃寺）・繩生廃寺・法輪寺・岐阜山田寺跡の5例がある。このほか法隆寺西院五重塔から出土した舍利容器は、再埋納されたが、模造品が残されている。また、中宮寺では舍利容器そのものは出土しなかったが、荘厳具が地中の心礎上面より出土した。この他、遺物は現存しないが文献から、舍利容器の出土や舍利埋納状況の明らかになるものに、飛鳥寺・山田寺・本薬師寺がある。こうした舍利容器の展示は、これまで催されたことはあるが、当館ではどのような埋納状況であったかを主体とした企画をした。そのため、タイトルも「仏舍利埋納」を強調した。とくに、法輪寺・崇福寺跡は心礎の設置状況を実大で復原し、舍利孔に舍利容器を安置した。こうした展示法によって仏舎利の歴史的背景を説明できた。

特別展示「法隆寺金堂壁画・飛天」 法隆寺金堂内陣の内壁には、浄土図と菩薩像からなる10面の壁画が、昭和24年1月焼失した。そのため、金堂壁画の実物は、もう見る事が出来ないと思っていた人も多かったようである。幸いにも、内陣小壁は金堂修理の準備のため取外され、収納庫に移されていた。そこに描かれていた飛天図は燃損をまぬがれ、金堂修理完成後も、内陣旧壁画として重要文化財に指定され保存されていた。その小壁は、内壁の須弥壇の上方、通肘木と格天井の間、桁行6間分、梁間4間分の各柱間を、さらに東で二分するため、計20面の壁画となっている。壁面の寸法は縦140cm、横70cm前後である。各面とも、2体の飛天が左手に華盤を捧げ、ヒレを両手に巻きながら、相前後して斜め右前方に向かって滑らかに飛行する。淡墨で輪郭をとり、彩色の後、濃墨でおさえる。その表現手法から、数組の絵師による作品である。1点の重量が約200kgあり、移動には、これまで以上に細心の注意をはらった。展示方法は、金堂内陣と同規模、同位置としたため、特製ケースを作成し、原位置を再現した。戦前、戦後を通して初公開であったため、研究者はもちろん多くの古代史ファンの関心を集め、当館では通常見ない観客層を動員した。

(猪熊兼勝)



飛鳥資料館イメージポスター